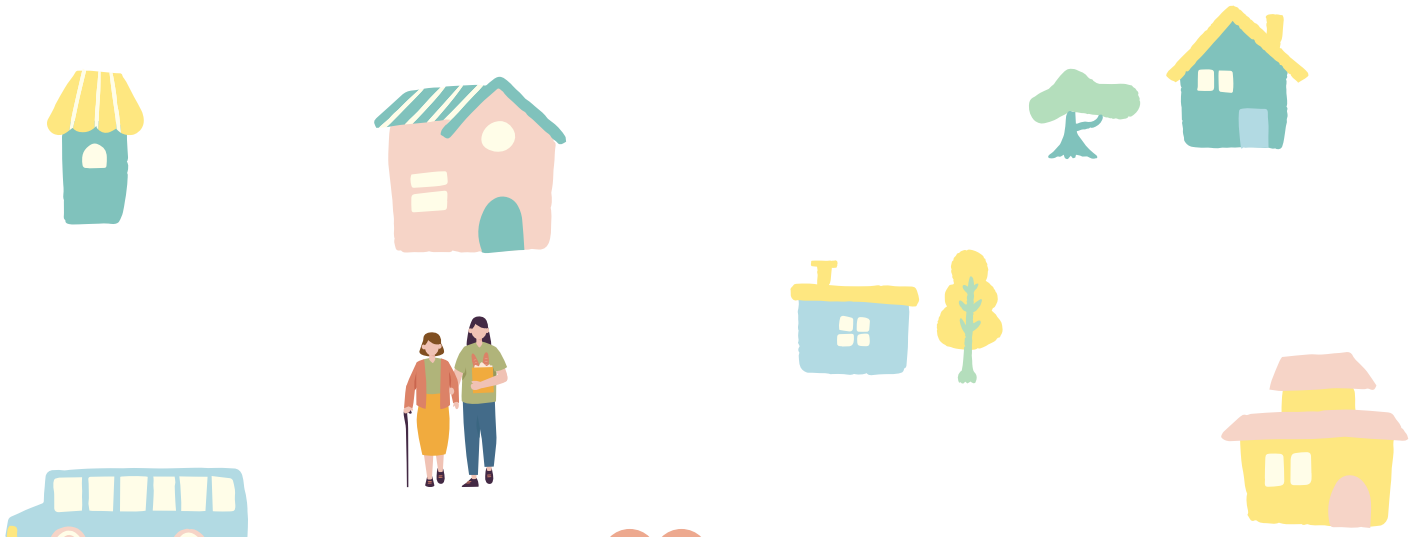
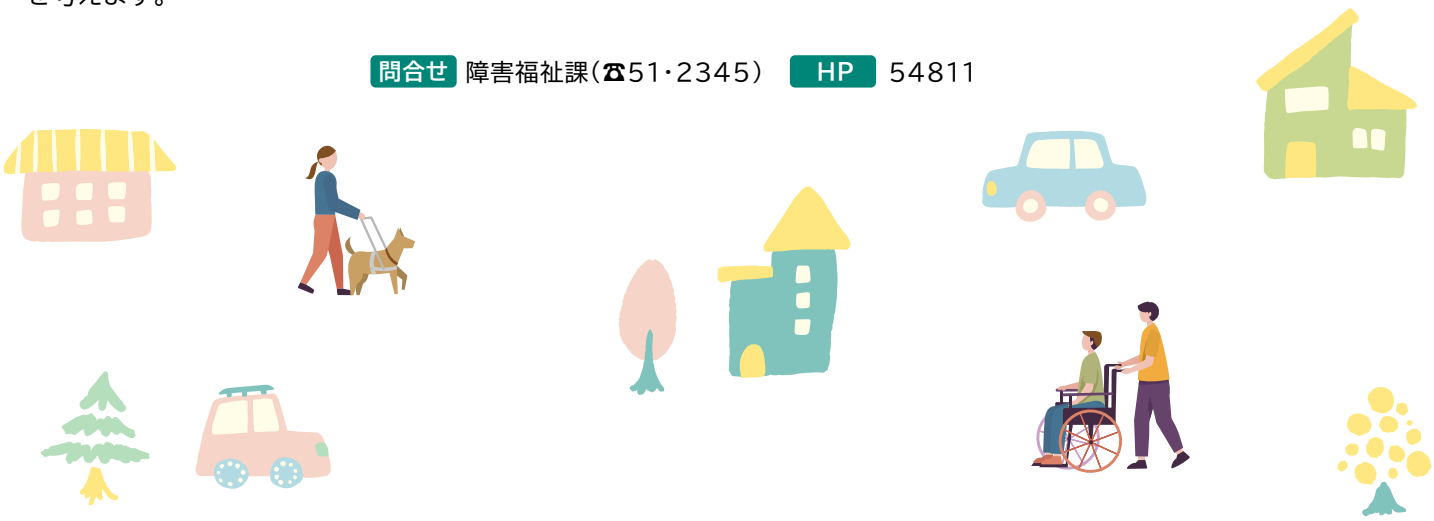


特集

コロナ禍で浮かび上がる壁
本当のバリアフリー社会を目指して

新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの生活にさまざまな影響を与えています。その中でも、障害があり、その特性に応じたコミュニケーションが必要な方々は、私たちの想像以上に大きな影響を受けていることをご存知ですか。今回は、障害のある方たちの声を通じて、本当のバリアフリー社会を築くために、一人ひとりができることを考えます。

問合せ 障害福祉課（☎51・2345） HP 54811



障害者からの戸惑いの声

豊橋市には約1万8千人の障害者が生活しています。多くの方々が新型コロナウイルス感染症の影響を受けており、戸惑いの声が上がっています。中でも、障害の特性に応じたコミュニケーションが必要な方々にとっては、今まで以上にコミュニケーションや生活に工夫が必要になるなど、感染症拡大を防ぐための対策の多くが障害者にとっての「壁」となっていることが分かってきました。

障害者が感じた大きな壁

例えば、感染症対策として用いられている飛沫防止パネル。必要な反面、声が聞こえにくくなったという方も多いのではないでしょうか。それは耳が聴こえない・聴こえにくい聴覚障害者にとっては、さらに大きな壁に感じられます。それに加え、人々が日常的にマスクを着用するようになったことで、今まで口の動きから読み取っていた言葉も認識することができなくなりました。

また、手で触れることで距離や物を確かめていた視覚障害者は、衛生面などから手すりや商品に触れにくくなったほか、人と距離を取ることが求められたことで案内や誘導を頼みづらくなるなど、同じく壁を感じています。

私たちはコロナ禍で浮かび上がったこれらの壁の数々を知り、本当のバリアフリーとは何かを考える必要があります。

「あなたの声が見えると安心できる」

佐藤 亜子さん（聴覚障害）

生まれつき両耳に障害のある佐藤さんに、聴覚障害者のコロナ禍での現状を伺いました。

目で見るコミュニケーション

高齢の聴覚障害者を対象に、ヘルパーの仕事をしている佐藤さん。コロナ禍でも障害当事者の視点で支えになりたいと、今年4月からは相談窓口で週に1回、ピアカウンセラーとしても働いています。

幼少期から身に付けた、相手の口の動きで言葉を理解する「口話」と、大人になってから覚えた「手話」を使って日々のコミュニケーションを取っています。

突然、変化した日常

新型コロナウイルス感染症が拡大し、人々がマスクを着けるようになると佐藤さんの日常生活は大きく変化します。例えばヘルパーの仕事中、手話があっても口の形が見えないことでコミュニケーションが難しくなりました。また、買い物に付き添っても、店員がマスクを着けているため、会話が読み取れません。多くの場合、手話が通じないため、筆談やスマートフォンへの文字入力を相手に頼まなければならないことが増えました。佐藤さんは「多くの聴覚障害者が困惑したと思います。」と振り返ります。

マスク越しでも笑顔が見たい

感染症が拡大すると同時に、ニュースなどでは以前より手話通訳が取り入れられることが増え、「私たち聴覚障害者への配慮が増えたことは嬉しいです。」と前向きに笑顔を見せてくれる佐藤さん。「私たちは音だけでは情報は得られません。手話はすぐに覚えられないかもしれませんが、ジェスチャーや筆談に笑顔で応じてくれると安心できます。」と、マスク越しのコミュニケーションの大切さを教えてくれました。

聴覚障害者の特徴

- 見た目では分かりくい
- 聴こえ方はさまざま
- 表情や口の動きも大切な情報源

私たちにもできる 3つのこと

聴覚障害のある方が過ごしやすくなるために行動してみましょう

1.身振りでわかりやすく

レジなどで店員が伝えようとしている内容が、マスクを着用しているため、より分かりにくくなりました。ジェスチャーで表すと、理解しやすくなります。

2.笑顔での対応を心掛ける

コミュニケーションの手段として筆談などを使う機会も増えました。マスクで顔が見えない分、目だけでも笑顔がわかるよう、相手の目を見て応えましょう。

3.連絡手段はFAXやメールで

デリバリーなどを頼みたくても電話はできないため、音声以外の方法を用意しましょう。

「声掛けで私たちの世界は変わる」

柘植 康守さん（視覚障害）

24歳で視力を失った柘植さんに、視覚障害者のコロナ禍での現状を伺いました。

音からの情報が頼り

「私の両目は少しの光が見える程度です。」そう話すのは、高齢者施設であん摩マッサージ師として働く柘植さん。新型コロナウイルス感染症がニュースで取り上げられ始めると、初めて聞く感染症に恐怖を感じたと言います。理由は、主に音から情報を得ている視覚障害者にとって、外出自粛や感染した場合の対応などの具体的な情報を入手することが困難だったことにありました。柘植さんはさまざまな人から情報を収集し、それを仲間内で共有しながら少しずつ新しい生活様式に慣れていきました。

触れることは必要不可欠

視覚障害者は、「触れる」ことが生活に欠かせません。慣れない場所で案内や誘導を頼む場合は、案内者の体などの一部に触れながら歩きます。欲しい物を探す時は、感触で確かめるため手で直接触れることもあります。

「ソーシャルディスタンスなど、人と距離を取るよう言われているのに、何かに触ることはとても抵抗があります。」と話す柘植さん。助けを求めづらくなった方も多いと言います。

声掛けは何より安心できる

視覚障害者は、耳から得る情報や手で触れることで日常生活を送ります。例えば、飲食店などが張り紙をしていても、何が書いてあるかわからず、なぜ閉店しているのかがわかりません。そんないつもと違う環境に戸惑っている視覚障害者たちがいます。

「視覚障害者が立ち止まり、困っていたら声を掛けてみてください。それを迷惑だと思ったことはありませんよ。声掛けはいつだって嬉しいし、安心できます。」

視覚障害者の特徴

- 音や触ることで認識しやすくなる
- 見え方はさまざま
- 点字ブロックが移動のための情報源

私たちにできる3つのこと

視覚障害のある方が過ごしやすくなるために行動してみましょう

1.距離感を伝える

消毒液への距離や、ソーシャルディスタンスの取り方が分かりにくいです。一声掛けて伝えると、距離感がつかめます。

2.街での声掛け

外出自粛により人出が減っています。「渡れますよ」「大丈夫ですか」など、少しの声掛けで周りの状況が分かって安心できます。

3.感触で伝える

日頃から買いたい物が探しにくいほか、トレー上で釣銭のやり取りは難しいため、感触で伝えると理解しやすくなります。

知っておこう！ 他にもある身近な壁

下肢障害などにより消毒液が使えない方

車いすや義足を使用している方は、フットペダル式の消毒液が使用できない場合があります。手でも使えるものや、自動噴射のものも設置するほか、状況に応じて配慮しましょう。

病気や障害などによりマスクが着けられない方

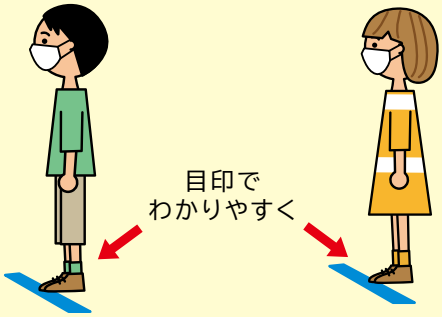
感染症対策の基本となるマスクですが、感覚過敏や呼吸器の病気などにより着用することができない方がいます。「何か事情があるかもしれない」と配慮しましょう。

ヘルプマークをご存知ですか？

ヘルプマークとは、義足や内部障害、妊娠初期など外見からは分かりにくい方が、援助や配慮を必要としていることを周囲に知らせることができるマークです。ヘルプマークの利用者を見掛けたら、電車やバスで席を譲る、困っていたら声を掛けるなど、思いやりのある行動を取りましょう。

HP 59914

具体的な指示の内容が理解しづらい方



「2mの間隔をあけて並ぶ」と指示されていても、距離感をつかむことが困難な方がいます。テープなどの印で、待つ場所をわかりやすく表示するほか、困っていたら声を掛けましょう。

コロナ禍で、多くの方の生活や気持ちが変化しています。社会とのつながりが減ったと感じる方や、周りを見渡す余裕がなくなった方も多いのではないでしょうか。

しかし、こんな時だからこそ、共に同じ社会を生き、困っている人々のことを考えるきっかけにしてみませんか。

障害者だけではなく、高齢者や子ども、妊婦、子育て世帯などさまざまな環境でコロナ禍を生きている人々がいます。すべての方が相手の立場に立って発言・行動することを心掛け、本当のバリアフリー社会の実現を目指しましょう。